

# 心象風景

Image

加藤鉦次  
KATO Shoji



風景埋葬 1974年 油彩・キャンバス 1,940 × 1,620mm

ローシェンナーの下地層を置くところから始め、グレーの階調が夜明け前の幻想的な空気を演出する、透けて見える下地のローシェンナーが空間を深める効果を出す、さらに透明色の褐色（セピア）かけ、かすかに空気の色を持たせ、空間を落ち着かせる。色層と図像を分けてグレーの階調で描き込む（グリザイユ）、三層の色層による最もシンプルな構造でイメージを得ることができた。

古典技法のもっとも基本的なやり方に出会う。

グリザイユ画法

油彩画の明暗法によるモノクロームによるアンダーペインティングやモデリングに用いられる画法であり17世紀のほとんどの画家が制作のプロセスに組み込まれていたようである。



宵祭り 津島天王川 2016年 油彩・キャンバス 2,273 × 1,818mm



懐かしい未来—祭— 2014年 油彩・キャンバス 2,273 × 1,818mm

## 混合技法

混合技法とは一枚の作品に媒材の異なる二種類以上の絵の具によって描く技法であり、主にテンペラ絵の具と油彩画の具による古典技法のことを言う。(油彩画の黎明期ルネッサンス初期15世紀フランドル派の画家たちから始まる)テンペラ絵の具に添加される油性分は乾性油や樹脂ニスなどであり、卵(全卵)1に対し同量の油性分1(乾性油0.5:樹脂油0.5)を混ぜ合わせればテンペラエマルジョンができあがる。これで練られたテンペラ白(チタニウムホワイト)は水性でありながら油彩の濡れているところに描くことができる。

油彩の色彩のうえに水性のテンペラ白で図像を描き込む。この繰り返しにより重層的空間を作り出していく。



半田亀崎潮干祭 I 2017年 油彩・テンペラ 2,273 × 1,818mm



左：懐かしい未来—田植え— 2014年 油彩・キャンバス 1,940 × 1,620mm



中：稲刈り・IV 2016年 油彩・キャンバス 1,940 × 1,620mm



右：農業図「春」I 2017年 油彩・キャンバス 1,940 × 1,620mm



伊良子崎・周遊（田原市） 2013年 油彩・キャンバス 910 × 727mm



夏の宴（岡崎市） 2014年 油彩・キャンバス 910 × 727mm

## 混合技法



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

- ①墨によるグリザイユ ②明暗の階調を広くまとめる
- ③インプリミトゥラ（画面全体におかれる第一層目の絵具層）溶剤が濡れているうちにテンペラ白による形の描き起こし四段階位の明暗階調を作る
- ④インプリミトゥラで使用した同系の色を透明（半透明）で塗る さらにテンペラ白で形を描き込む
- ⑤油彩で固有色・影の色あるいはベースになる色を置く
- ⑥～⑧部分的に濡れているうにテンペラ白によるハッチングで集中的に下の色に入れ込む



半田春祭り 乙川 唐子あそび(半田市) 2016年 油彩・キャンバス 910×727mm



残暑の五社稲荷神社(小坂井市) 2017年 油彩・キャンバス 727×727mm



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



完成

- ⑨油彩、グレースによる中間ワニスによる半被覆
- ⑩油彩・テンペラ白が交互に近い形で細部に向かって描き込まれていく
- ⑪テンペラ白の量が⑫に向かってどんどん少なくなっていく ⑩～⑫繰り返す、細部に向かって描き込む
- ⑬白テンペラでハイライトを入れる



散歩みちの花 2018年 ブロックス F 30



アマリリス F 20



黄花コスモス P 30



ケシ S 8



ヒメジオンと雀 F 6



麦と雀 P 6



アネモネ F 6



ケシ F 6



グラジオラス S 12



散歩みちの花 2018年 F30



サンスベリアと温室 F20



チュウリップ M40



コスモス F15

#### 散歩みちの花

日課の散歩、田畑を通り抜けていく、見えてくるものが次々と移り変わる。生れたときからここにある風景（原風景）のなかをあるく。少しずつその姿はかわっていく、絵として記憶にとどめなければならない。

油彩は濡れ絵である—油彩は絵の具が濡れている状態が最も美しい。また、油と樹脂の光による屈折により空気の色を描き出す。どんな画材より深い空間が描けるのである。作り出した空気の色を自由に歩き回る。見ている人の視点が前面にある花から後方の風景へ画面の中を移動する、まるで絵の中を散歩するように。